

人びとの日常的な^{モビリティーズ}〈移動〉の実践を理解する

——エスノグラフィックなアプローチとその展開——

大 橋 香 奈

1. 研究の背景と目的

1.1 モビリティーズ・パラダイム

移動の「レンズ」を通した思考によって、これまでとは一線を画す社会科学がもたらされ、この新たな社会科学は、さまざまな理論、方法、論点、解決策を生み出す力を有するようになっている〔Urry 2007= アーリ 2015 : 32〕。

J. アーリ (J. Urry) はかつてこのように述べ、「モビリティーズ・パラダイム」を打ち立てると宣言した。新しいパラダイム（世界をどう見るかという一般的様式）として^{モビリティーズ}〈移動〉¹⁾に注目すべきだという主張である。彼は、従来の社会科学では「社会的移動（個人の社会経済的な階層や、社会的な集団における位置の上下への移動）」ばかりに焦点が当てられてきたと指摘するとともに、空間的な^{モビリティーズ}〈移動〉に関する研究の必要性や重要性を訴えた。

日本でも近年、さまざまな分野で「モビリティ」がキーワードとして掲げられている。カタカナ表記の「モビリティ」は、新たな「交通手段・移動サービス」を表現する際によく使われる。国土交通省は、日本版 MaaS（マース：Mobility as a Service）を推進・支援するとして、2019 年から特設ウェブサイトでの情報公開を開始した。ここでは、MaaS は「地域住民や旅行者一人一人のトリップ単位での移動ニーズに対応して、複数の公共交通やそれ以外の移動サービスを最適に組み合わせて検索・予約・決済等を一括で行うサービス」と定義されている〔国土交通省 2021〕。

しかし、アーリの「モビリティーズ・パラダイム」の議論における^{モビリティーズ}〈移動〉は、単に「A から B へ動く」ことや、そのための交通手段・移動サービスのことを意味するのではない。アーリは、一定の境界に枠づけられた領域としての「社会」に人びとが帰属、「定住」することを前提とする価値観や仕組みによって、さまざまな種類の^{モビリティ}「移動」が果たす役割や意味が見過ごされてきたという問題意識を持っていた。その上で、社会的なるものは一定の境界に枠づけられた領域としての「社会」のなかにはなく、それを越えるさまざまな種類

人びとの日常的な〈移動〉の実践を理解する

の「移動」の組み合わせや相互関係、つまり複数形の〈移動〉のなかにこそ見出されるべきだと考えた。具体的には、以下のような五つの「移動」の組み合わせや相互関係に着目するよう提案している。〔アーリ 2015 : 76〕。

- 仕事、余暇、家庭生活、快楽、移住、逃亡のために行われる身体による旅。(日々の通勤から人生に一度の国外脱出に至るまで) まるで対照的な時空間の様式によって編成されている。
- 生産者、消費者、小売店への物の物理的な動き。その他に、贈り物や土産物のやりとり。
- 新聞や放送などのマルチメディアに次々に登場する場所や人のイメージを通して行われる想像による旅。
- しばしばリアルタイムでなされ、それゆえに地理的距離と社会的距離を超えたバーチャルな旅。
- 伝言、書字、手紙、電報、電話、ファックス、携帯を介して人から人へのメッセージを通して行われる通信による旅。

こうした人間の身体的移動、物、情報、イメージ、メッセージなどの空間的移動、それらの組み合わせや相互関係としての〈移動〉が人びともたらす感情や、心理学的な意味での影響、それらを可能にしている手段、インフラ、システムといったことは、これまで伝統的な社会学の中心的な議論の対象にはならなかった〔Sheller 2014〕。

アーリやシェラー (M. Sheller) らは、世界の〈移動〉研究を集約し議論を発展させるため、2005年に国際論文誌“Mobilities”を創設し、2006年に創刊号を出版した。創刊から15年が経過した2021年現在、“Mobilities”のウェブサイトでの論文ダウンロード数は年間14万件に達し、論文誌の影響力を測る指標であるインパクトファクターは2.435(2020年)になった〔Informa UK Limited 2021〕。2011年には、人、資源、商品の移動のプロセス、その構造や結果に関する最先端の論文を掲載する国際論文誌として“Transfers”が創刊された。この論文誌では、時代や技術の進歩によってどのような「移動」の経験が可能になり、形成され、媒介されてきたかを探究することを目指している。さらに、2016年には、理論をベースにした応用研究や実践志向の視点を重視する〈移動〉研究の国際論文誌として“Applied Mobilities”が創刊された。

〈移動〉研究は、社会学に片足をおきながら、社会学的な関心(不平等、権力、階層)、地理学的な空間への関心、人類学の文化的な関心、メディア・スタディーズ的な関心をつなぎあわせた、学際的分野となった〔Sheller 2014〕。各国に研究を推進するための組織も誕生した。ランカスター大学のCentre for Mobilities Research (CeMoRe)、オールボー大学の

Centre of Mobilities & Urban Studies (C-MUS), ドレクセル大学の Center for Mobilities Research and Policy などが、研究拠点として挙げられる〔そのほか CeMoRe 2021 を参照〕。

1.2 モバイルな方法

21 世紀に入り、人びとの日常生活は、かつてないほど距離を超える断続的で交錯した多様な〈移動〉^{モビリティーズ}を伴う、モバイル（移動的）なものになっている〔エリオット・アーリ 2016〕。2020 年、世界中に拡散した COVID-19 が甚大な被害をもたらし、各地で身体的移動が制限されることになった。これによって逆説的に、現在の都市社会での日常生活が多様な〈移動〉^{モビリティーズ}によって成り立っている（いた）という事実を思い知らされた、という人は数多くいるだろう。〈移動〉^{モビリティーズ}の研究者たちもこの事態に反応し、続々と論考を発表している〔Sheller 2020a, Kellerman 2020, Cresswell 2021, Freudendal-Pedersen & Kesselring 2021 など〕。

Jensen [2021] は、これを機に、〈移動〉^{モビリティーズ}と現代都市の関係を COVID-19 「とともに考える」ことで、人びとの日常的な〈移動〉^{モビリティーズ}の実践を、これまでよりニュアンスを大切に深く描写すべきではないかと提案している。例えば、バス停での並び方、地下鉄での座り方、歩道での歩行者のふるまい方をはじめ、生活のなかで行われているさまざまな、ありふれた実践のことである。Jensen [2021] は、COVID-19 が、今までの〈移動〉^{モビリティーズ}の「あたりまえ」をとらえ直し、未来のあり方を考えるための「窓」になると述べている。Sheller [2020b] は、伝統的な都市計画や交通計画などの分野では人びとを「合理的なアクター」として想定していたが、批判的な〈移動〉^{モビリティーズ}研究では、人びとの「生きられた経験」に注目し、その複雑さや曖昧さや矛盾を含めて理解する必要があると述べている。

人びとの日常的でありふれた〈移動〉^{モビリティーズ}の実践を理解するためには、どのように調査研究すればよいのだろうか。これまで〈移動〉^{モビリティーズ}研究においては、先ほど述べた五つの「移動」^{モビリティーズ}の組み合わせや相互関係に焦点が当てられてきた。人びとの間で〈移動〉^{モビリティーズ}を通して、どのように／どのような社会的関係が形成されているのか、21 世紀の都市において人びとはどのように／どのような〈移動〉^{モビリティーズ}を実践したり経験したりしているのか、といった問いが探究されている〔Büscher, M. et al. 2011〕。その際、調査対象が「動いている」^{オン・ザ・ムーブ}のであれば、調査研究の方法もまた「動いている」^{オン・ザ・ムーブ}必要があると考えられている〔アーリ 2015〕。かつて人類学者のプロニスワフ・カスペル・マリノフスキ (Bronisław Kasper Malinowski) は、見知らぬ島に入り込みテントを設置して、長い期間じっととどまり観察することで、そこで暮らす人びとを理解しようとした。このように一つの場所にとどまり対象を理解しようとするアプローチは、「モビリティーズ・パラダイム」においては時代錯誤になりつつある〔Vannini and Scott 2020〕。代わりに、さまざまな「モバイルな方法 (Mobile Methods)」〔Büscher, M. et al. 2011〕が開発、応用されてきた。

人びとの日常的な〈移動〉の実践を理解する

「モバイルな方法」の例としては、調査対象者の動きを観察すること（直接観察だけでなく、さまざまなデジタルな撮影・記録技術の活用を含む）、調査対象者と「ともに歩く」こと（インタビューも組み合わせる）、調査対象者に自分がいつ、どこを、どのように動いていたかを「時空間日誌」として記録してもらうこと、想像による移動やバーチャルな移動に関連するメディア利用の記録を分析したり、それに関してインタビューしたりすることなどが挙げられる〔アーリ 2015：64-68〕。

これらの「モバイルな方法」を用いた調査研究のプロセスや成果について、欧米を中心とした海外の研究者による議論は、先に示した国際論文誌や研究拠点で活発に行われている。しかし、日本においては、人びとの^{モビリティーズ}〈移動〉の実践や経験を調査研究するための「モバイルな方法」に関する学術的な議論は、活発に行われているとは言い難い状況である。個別の研究や教育の現場で取り上げられている例はあるが、日本を代表する学術論文のデータベースである「J-STAGE」および「CiNii」で、「モバイルな方法」、「モバイル・メソッド」、「mobile methods」で検索しても、該当する社会科学系の論文は1件もない（2021年7月現在）。このキーワードを使わずに、実質的に類する内容を扱っている論文はあるかもしれないが、その場合、本稿で取り上げている「モビリティーズ・パラダイム」とは異なる系譜の研究と考えられる。

1.3 研究の目的

こうした背景をふまえ、本研究では、人びとの日常的な^{モビリティーズ}〈移動〉の実践を調査研究するための「モバイルな方法」について検討する。特にエスノグラフィック（民族誌的）なアプローチに注目し、その方法論や具体的な調査研究の事例をふまえ、意義や可能性を議論する。

2章ではエスノグラフィックなアプローチの方法論、3章では日常的な^{モビリティーズ}〈移動〉の実践を理解するための概念的枠組みについて、先行研究をもとに論じる。4章では筆者が実施した調査研究の事例を取り上げて分析、考察し、5章では研究を総括する。

2. エスノグラフィックなアプローチ

2.1 エスノグラフィーの伝統的な調査技法

人びとの日常的な^{モビリティーズ}〈移動〉の実践を理解するための調査研究では、「モバイルな方法」のなかでも、エスノグラフィックなアプローチが採用される。ここでいう人びとの「実践」とは、「観察可能な行為（action）であり、かつ文脈のなかに埋め込まれており、解釈が可能である」と考えられている「文化的実践」のことである〔箕浦 1999：12-13〕。エスノグラフィー（民族誌）は、人びとの「文化的実践」の意味を読み解き、社会的相互作用のなかでそれらがどのように現れているかといったプロセスを理解することを目指す方法論であり、

その成果のことでもある〔箕浦 1999〕。エスノグラフィーの伝統的かつ主要な調査技法は、観察、インタビュー、文書研究である。アングロシーノ〔2016〕の解説を参考に、以下にそれぞれの技法の特徴をまとめる。

- 観察：五感を使って、人びとの実践や相互作用をとらえる。調査者が調査対象の人びとに直接関わることなく観察する非干渉的な方法と、調査者が調査対象の人びとの生活の現場に許可を得て参加し観察する参与観察がある。非干渉的な方法の例として、公共の場で許可を取らずに人びとの様子やふるまいを観察することが挙げられるが、相手のプライバシーを侵害するなどの倫理的な問題につながるリスクもある。そのため、エスノグラフィーの調査研究では、相手に許可を取って行う参与観察が選択されることが多い。観察の時点では、先入観を持たず、推測や解釈を避けて、詳細に記録することが必要である。組織化された記録として、フィールドノートを作成する技術が求められる。
- インタビュー：調査対象の人びとが生きている意味の世界を、言葉のやりとりで理解する有用な方法である。インタビューは、参与観察のプロセスで一般的な会話のようにしてインフォーマルに行われる場合もあれば、時間をそのために確保して面接のようにフォーマルに行われる場合もある。エスノグラフィーの典型的なインタビューは、事前に想定していなかった質問にも開かれた「オープンエンド」の性質を持つ。相手の生きている意味の世界を探り、ニュアンスを探究するために、深く掘り下げるための探索的質問を投げかけることが重要である。
- 文書研究：エスノグラフィーにおいては、公式・非公式な目的のために個人や集団によって蓄積された資料を、情報源として活用する。こうした資料は、時間の経過に伴う出来事や行動の変化について研究したり、直接観察したり質問したりするのが難しい対象を理解したりする場合に、特に役に立つ。ただし、資料を利用する際には、どのような目的やプロセスで、作成・収集された資料なのかを確認する必要がある。

以上のような伝統的なエスノグラフィーの調査技法は、近年、デジタル・メディアや技術の影響によって変化しつつある。例えば、現在では多くの人がスマートフォンに代表されるモバイル・メディアを持ち歩いており、それらを使うことで誰もが容易に写真や動画の撮影、録音を行える。これらの技術は、観察やインタビューにおいて、さまざまなかたちで活用されている。観察の現場で、許可が得られている場合や、対象者のプライバシーを侵害するリスクがないと考えられる場合には、写真や動画で記録することで、手書きよりも迅速に詳細なデータを収集することが可能である。インタビューにおいても、音声だけでなく動画で記

人びとの日常的な〈移動〉の実践を理解する

録することで、調査対象者の語りのニュアンスを、表情や身振り手振りなどの非言語的コミュニケーションの要素とともに保存することができる。

また、文書研究において使える資料も、人びとのデジタル・メディア利用によって多様化している。「生活史研究」を推進してきた K. プラマー (K. Plummer) は、経験を現象学的に把握するには多くの方法があるが、時間をかけて調査対象者と議論するとともに、「世界」に対する調査対象者自身の見方についての資料である「生活記録」を集めるよう提案している。それによって個人の具体的な生活をめぐる、底深くかつ直接的な理解を深めていくことが重要だという〔プラマー 1991〕。加藤〔2006〕は、この考え方を応用し、携帯電話など個人が利用しているメディアに蓄積されるさまざまなデータも、「生活記録」として活用できると提案している。

2.2 デジタル・エスノグラフィー

ピンク (S. Pink) らは、デジタル・メディアや技術が人びとの日常生活の一部になっていることを前提とした新たなエスノグラフィーのあり方を「デジタル・エスノグラフィー (Digital Ethnography)」と呼び、その原則として五つの点を挙げている〔以下に Pink et al. 2016: 8-14 より要約して和訳〕。

- 多様性：デジタルに関わる方法の一つではない。デジタル・エスノグラフィーの研究の仕方は、研究課題や、対応しようとしている問題に応じて常にユニークなものになる。デジタル技術やメディア（そしてそれを使って人びとができること）が、いかに日常生活のインフラと相互依存しているかにも注意する必要がある（例えば、デジタル・メディアを利用するには、電源や WiFi 接続が必要である）。
- 非デジタル中心主義：デジタル・エスノグラフィーでは、デジタルは脱中心化される。デジタル・メディアが、どのように人びとの日常生活の一部となっているかを理解するためには、デジタル・メディアの特性や使用方法だけではなく、デジタル・メディアが使用されている活動の領域に焦点を当てる必要がある。例えば、デジタル・メディアは現在多くの人の人間関係の一部を形成しており、人間関係の新しい側面を可能にしている。しかし、人間関係における主なやりとりが、デジタル・メディアを用いてオンラインで行われている場合でも、人間関係が純粋にデジタルだけで完結することはあまりない。人間関係がどのように営まれているかを理解するためには、デジタルの枠を超えて考える必要がある。
- 開放性：デジタル・エスノグラフィーは、オープンである。それは、特定の方法ではなく、開かれたプロセスであることを意味する。研究プロジェクトに参加する人びとに対して、広く開かれている。エスノグラフィーは本来的に、調査のプロセス

で他者と協働するという点で開かれているが、デジタル・メディアや技術がさまざまな協力や参加の仕方を可能にするという点で、デジタル・エスノグラフィーはより開かれている。

- 再帰性：デジタル・エスノグラフィーでは、調査者が自身を省察することが求められる。調査者は、他者や物事との出会いを通して知識を生み出す。省察することは、他者やその生活、経験、環境についての知識や、それを知るための方法を生み出すための、積極的かつ創造的なルートになる。また、エスノグラフィーのプロセスでは、他者との協働が重要であることを認識し倫理的に取り組むためにも、省察が重要であると考えられる。
- 非伝統性：デジタル・エスノグラフィーでは、研究方法においても、研究成果の発表においても、デジタル技術やメディアを取り入れることで、コミュニケーションのオルタナティブな方法を考えることが求められる。伝統的な方法では明らかにできなかったことに接近するにはどうしたらよいか、伝統的な方法では伝えにくかったことを伝えるにはどうしたらよいかを探索することが重要である。特に、写真や映像などのビジュアルな方法を取り入れるデジタル・ビジュアル・エスノグラフィーは、調査のプロセスの感情、関係性、物質性、活動、これらの構成を喚起する力があるので、これまでの学問や分野の境界を越えられる可能性がある。

こうしたデジタル・エスノグラフィーの考え方は、人びとの日常的な〈移動〉^{モビリティーズ}の実践を理解する「モバイルな方法」を検討する上でも有用である。伝統的なエスノグラフィーの考え方に加え、新しいデジタル技術やメディアが人びとの日常生活の一部になっていることを前提としたデジタル・エスノグラフィー的なアプローチも取り入れているのが、「モバイル・エスノグラフィー (Mobile Ethnography)」である。

2.3 モバイル・エスノグラフィー

モバイル・エスノグラフィーにおいては、これまでのエスノグラフィーの特徴に、「人びとのモバイルな実践を実証的に調査する」、「調査者の側に‘動く’ことを要請する」という新たな特徴が追加される〔Vannini and Scott 2020〕。さまざまなタイプのモバイル・エスノグラフィーの調査研究が実施されているが、よく行われている三つのタイプの特徴を以下に挙げる〔Vannini and Scott 2020：60-65 より要約して和訳〕。

- 物を追跡する：原材料や製造品をはじめとする、物の移動の軌跡を辿る方法である。時には原材料の収集から、製造、流通、販売、消費、廃棄やリサイクルに至るまでの複雑なグローバルな経路を辿る。例えば、『La Camioneta』〔Kendall 2012〕とい

人びとの日常的な〈移動〉の実践を理解する

うドキュメンタリー映画作品では、このアプローチが取り入れられている。この映画では、かつてアメリカのペンシルバニア州で学校の生徒たちを運ぶために使われていたスクールバスが、古くなってオークションで売られ、グアテマラの業者によって改造され、現地で労働者の送迎に使われるようになるという変貌のプロセスを描いている。バスのグローバルな移動を追跡することにより、地理的、経済的、政治的な条件の違いによってもたらされる、バスをめぐる新たな課題や需要が見えてくる。

- モバイル・オートエスノグラフィー：調査者自身が主役となる方法である。調査対象者の経験を語るのではなく、調査者が自分自身の移動の実践や経験に注意を向け、それについて語る。例えば、Larsen [2014] は、慣れ親しんだ場所である自分の故郷のコペンハーゲンでのサイクリング、慣れない場所であるロンドンでのサイクリング、競技用自転車での長距離通勤など、それぞれ異なる自転車での移動体験を、オートエスノグラフィーを利用して調査研究している。それによって、自転車移動におけるルーティーン、習慣、感情的能力がどのように培われ、実行されているかが明らかにされている。Spinney [2011] は、人びとがなぜ、どのように移動するのかを理解するためには、表象性の低いもの、つまり、一瞬で儚い、移動の感覚的な側面に注目することが重要であると述べており、その意味で、Larsen [2014] のようなモバイル・オートエスノグラフィーの調査研究は有用だと考えられる。
- 同行する：調査者が調査対象者とともに行動する方法である。この方法では、人びとの日常生活において具現化されている移動の実践を、調査者が直接体験しながら理解することができると考えられている。近年、この方法には、さまざまなかたちで新しいデジタル技術やメディアが取り入れられている。例えば、調査者が実際に同行するのが困難な場合である。調査対象者にウェアラブルカメラなどを使って道中を記録してもらったり、位置情報アプリを使って移動の経路を記録してもらったりして、後からそれらの記録を、調査者と調査対象者が一緒に見ながらインタビューすることで、同行した場合と同じような洞察を得ることも可能である。

以上のようなモバイル・エスノグラフィーの調査研究により、人びとがそれぞれの生活世界において、どのように／どのような^{モビリティーズ}〈移動〉を実践したり経験したりしているかを、詳細に理解できるようになることが期待されている。

3. 日常的な〈移動〉^{モビリティーズ}の実践を理解するための概念的枠組み

ここまで、人びとの日常的な〈移動〉^{モビリティーズ}の実践を調査研究するためのエスノグラフィックなアプローチについて述べてきたが、それによって得られるデータを、どのように分析すればよいだろうか。ここでは、Jensen [2013] の「〈移動〉^{モビリティーズ}の演出モデル」という概念的枠組みを導入して考える（次頁の図1）。

この枠組みのベースには、E. ゴッフマン（E. Goffman）の「ドラマツルギー」の視点がある〔Goffman 1959〕。この枠組みでは、人びとの「実際の〈移動〉^{モビリティーズ}」が、計画、デザイン、規制、制度による決定や介入といった「上からの演出」と、日常生活における多様な移動場面での、選択、気分、合理性、戦略といった複数の状況的影響を受けながら人びとが行っている「下からの演出」の間で実践されていることが示されている。

この枠組みでは、具体的には以下の三つの分析要素が用いられる〔Jensen & Lanng 2017: 9 より要約して和訳〕。

- ・ 〈移動〉^{モビリティーズ}は、物質的空間のなかに現れるものとして理解されなければならない。
- ・ 実践される〈移動〉^{モビリティーズ}は社会的な出来事であり、複雑な社会的相互作用によって成り立っている。そこでは当事者の規範や文化が、日常的な状況において、他者と関わるなかで現れたり、調整されたりする。
- ・ 人びとが「〈移動〉^{モビリティーズ}を実践する」という事実特に注意を払う。つまり、それは身体化、具現化されたパフォーマンスなのである。身体的能力と認知的能力、そして複数の感覚（触覚、聴覚、視覚、運動感覚、嗅覚など）が、状況を媒介している。

この「〈移動〉^{モビリティーズ}の演出モデル」は、「演出」という演劇的なメタファーによって、人びとの日常的な〈移動〉^{モビリティーズ}の実践がどのように成り立っているかを分析し、可視化するツールとして役に立つと考えられる。この枠組みは、特にデザイン分野で応用されており、日常のありふれた〈移動〉^{モビリティーズ}の状況における、問題と可能性の両方に目を向ける調査研究に結びついている〔Jensen & Lanng 2017〕。

4. 調査研究事例：「トランスナショナルな生活世界」^{モビリティーズ}を生きる人の〈移動〉の実践

ここまで、人びとの日常的な〈移動〉^{モビリティーズ}の実践を調査研究するためのエスノグラフィックなアプローチと、それによって得られるデータを分析するための「〈移動〉^{モビリティーズ}の演出モデル」という概念的枠組みを取り上げた。本章では、筆者が実際にエスノグラフィックなアプロー

人びとの日常的な〈移動〉の実践を理解する

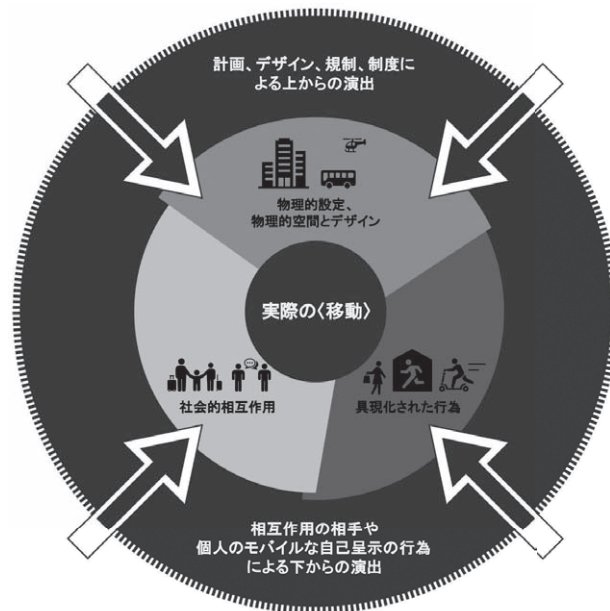


図1 モビリティーズの〈移動〉の演出モデル [Jensen 2013 をもとに筆者が作成し和訳]

チで実施した調査のデータを、^{モビリティーズ}「〈移動〉の演出モデル」を使って分析し、考察する。

4.1 調査の概要

・調査の目的

本調査では、国境を越えて移住し、その後、母国や他国で暮らす家族との国境をまたがる交流を続けることによって成り立つ「トランスナショナルな生活世界」²⁾ [小内 2007] を生きる人の^{モビリティーズ}〈移動〉の実践を明らかにする。特に、アーリ [2015] が掲げた五つの^{モビリティ}「移動」のうち、国境を越える移住という「身体による旅」の結果として、日常的にどのように／どのような「通信による旅」の実践をしているのかに焦点を当てる。

・調査対象者：リディア（70代）

リディアは、1990年に日本で働いていた夫が病気になったことを機に、日本に移住した。夫のカルロスはかつてペルーで働いていたが、社会情勢が不安定になり仕事を失い、1989年にリディアと大学生の息子、娘をペルーに残して、日本に出稼ぎのため移住した。1990年、リディアはカルロスとの再会と観光をかねて日本を訪問した。その際、日本での過酷な労働環境が原因でカルロスが健康を害していたことが発覚し、リディアは看病のため子どもとともに日本に移住することを決意した。リディアは、夫の入院や自身の移住経験により、緊急事態が発生した際に、日本で暮らす外国人が言語的にも心理的にも制度的にも満足なサ

ポートを得られないことを、身をもって知った。そのことがきっかけとなり、住まいの近くのカトリック教会を拠点に、困っている外国人をサポートするボランティア活動グループを設立した。以来、主婦として家庭を守りながら、25年以上、在留外国人のためのボランティア活動を続けている。

・調査方法

2015年5月から2018年4月にかけて、彼女の自宅やボランティア活動の現場での参与観察や同行調査、写真や日記や手紙などの「生活記録」を用いたインタビュー調査を、期間をあけて10回実施した。調査のプロセスでは、上述のデジタル・エスノグラフィーやモバイル・エスノグラフィーのアプローチを取り入れ、写真や映像による記録を行った。

調査開始前に、彼女に調査の目的や内容を説明し、参加の同意を得た。また、調査終了後に、研究目的でのデータの公表について再度確認し、許可を得た。

4.2 リディアの日常生活

リディアは、神奈川県内の市営住宅に夫のカルロスとふたりで住んでいる。平日、夫のカルロスは朝4時頃に起きて出勤する。以前は工場で働いていたが、リーマンショック以降景気が悪化した影響により工場での仕事を失い、現在は清掃員の仕事をしている。リディアは朝6時頃に起きて朝食をとり、支度をして、ボランティア活動に出かける。リディアは、母語のスペイン語のほか、英語、日本語を話せる。困っている外国人のために、入国管理局（現在の出入国在留管理庁）や裁判所に同行して通訳をしたり、弁護士や医師と連携してカウンセリングを行ったり、さまざまなワークショップを開催したりしている。日中はボラ



画像1 リディアの朝の様子（2016年1月に撮影した動画のスクリーンショット）



画像2 自宅の玄関（2016年1月に撮影した動画のスクリーンショット）

ンティア活動で忙しく出歩いているが、5時までには帰宅し、カルロスのために夕食をつくる。5時以降には、プライベートなことしかしないと決めている。

いつも朝食時は一人だが、家族の写真を見ながら過ごす。リディアの自宅には、玄関のドアや壁、キッチンの戸棚の上、部屋の壁やテーブルの上など、いたるところに家族の写真が飾られている。いつも持ち歩いている手帳の表紙にも写真がある。大晦日には、だいたい毎年、家族が集まる。ここで言う「家族」は、夫、近所で暮らす息子夫婦とその3人の子ども、アメリカで暮らす娘と娘の2人の子どもだ。

4.3 日常的でトランスナショナルな「通信による旅」の実践

リディアが「家族」と言われて最初に思い浮かべるのは、夫、近所で暮らす息子夫婦とその子ども3人、アメリカで暮らす娘と娘の子ども2人だ。リディアには13人のきょうだいがいて、彼／彼女らとその子どもや孫、ひ孫、玄孫を含めた200人以上も「家族」と考えている。

アメリカに暮らす娘は、Skypeを使って、頻繁にリディアの携帯電話に連絡をしてくる。リディアは13人のきょうだいのなかで、上から3番目だ。上に2人の姉、下に4人の妹と7人の弟がいる。きょうだいの多くはペルーに住んでいるが、イタリア、フランス、ドイツ、スペインに住んでいる人もいる。上の2人の姉はおとなしかったので、リディアがきょうだいのなかでは、いつもリーダーの役割をしている。海外の家族と連絡をとるのには、固定電話を最もよく使う。「やっぱり声をききたい」と理由を説明する。SkypeやLINEなどのサ



画像3 PCでFacebookを使う様子
(2017年5月に撮影した動画のスクリーンショット)

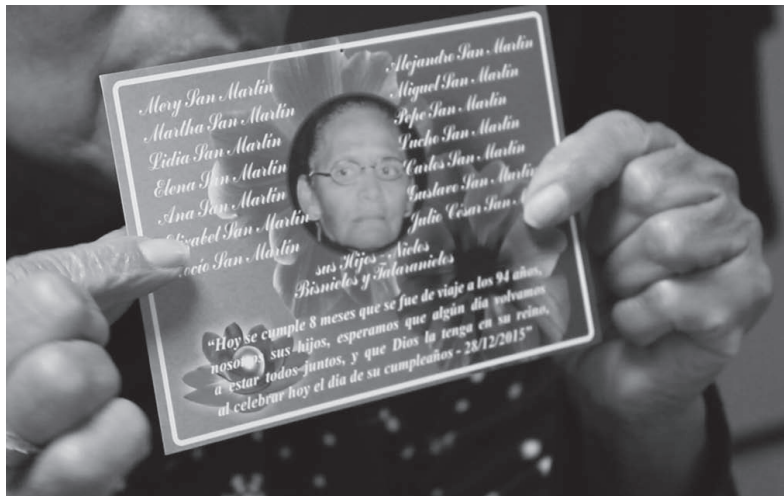
ービスを使えば無料で通話できることは知っているが、新しい技術のことは「こわいし、よくわからない」ので、国際電話用プリペイドカードを使って、固定電話から海外で暮らすきょうだいに電話をかける。きょうだいたちも困ったことがあると、何時でもかまわず、固定電話にかけてくる。リディアからきょうだいに手紙や荷物を送ることもあるが、ペルーやイタリアだと「郵便局がいい加減でちゃんと届かない」ということで、頻繁には送らない。

最近になって、きょうだいたちがFacebookを使い始めたので、写真を見るために「がんばって使うようになったが、自分が投稿することはほとんどない」。

2016年に夫がスマートフォンを買って、初めてLINEを使ってアメリカにいる孫とビデオ通話した。「顔が見えるのが信じられなかったけど、うれしくて興奮した。でも大事なときは、やっぱり直接会いたい」という。以前、妹が病気になって手術をするという連絡がきたときは、夫に頼みこんで、すぐにイタリア行きの航空券を買い、会いに行った。いざというときに海外にいる家族に会いにいけるように貯金している。リディアは70代になり、海外で暮らす家族に会いに行くのは簡単ではなくなってきたと感じている。「機械は大嫌い」だけど、SkypeやLINEのビデオ通話を使うことも検討しなければならないと考えている。

リディアにとっての「家族」の考え方は、親の教えの影響が大きい。親の考え方や価値観を大事にしてきた。「家族」の関係を維持するには、「いつでも、本当の気持ちを言うことが一番大事」だと思っている。海外に住んでいてお互いに離れていても、「大変なことがあるときは、いつもみんなでぎゅっと集まる」と、自分の両手を組み合わせる仕草をしながら言う。

数年前、リディアの母が94歳で亡くなったが、そのときはきょうだいたちと頻繁に電話を掛け合った。母を偲ぶパーティーをペルーの弟が企画したが、その際は、弟が各国で暮ら



画像4 亡くなった母を偲ぶパーティーの招待状
(2016年1月に撮影した動画のスクリーンショット)

しているきょうだい全員に連絡して、全員の名前を書いた招待状を送ってくれた。リディアはそれを大切に、ダイニングキッチンに貼っている。

4.4 「^{モビリティーズ}〈移動〉の演出モデル」による分析と考察

リディアの日常的でトランスナショナルな「^{モビリティーズ}通信による旅」の実践を、「^{モビリティーズ}〈移動〉の演出モデル」を使って考える。三つの分析要素「物理的設定、物理的空間とデザイン」、「社会的相互作用」、「具現化された行為」の間で、どのように／どのような「^{モビリティーズ}通信による旅」の実践が成り立っているのだろうか。

リディアの「^{モビリティーズ}通信による旅」は、自分は日本に住んでいて、通信の相手である家族は、日本、ペルー、イタリア、フランス、アメリカ、ドイツ、スペインに住んでいるという「物理的設定」において実践されている。リディアが、自宅において利用可能なトランスナショナルな通信手段は、固定電話（国際電話用プリペイドカード使用）、携帯電話（娘からのSkypeからの通話の受信用）、国際郵便、Facebook（PCで利用）である。いずれの通信手段も概ね問題なく使える状態ではあるが、郵便に関しては相手の国によっては信頼性が不十分で使えないという制度上の問題がある。その他の手段について、どのように使い分けしているのかを理解するには、「社会的相互作用」、「具現化された行為」の面を見る必要がある。

「社会的相互作用」の面としては、当事者の規範や文化が、日常的な状況において、他者と関わるなかで、どのように現れたり、調整されたりしているかがポイントになる。リディアの場合、海外で暮らす家族との関係において、上述のように常に「親」や「リーダー（姉）」として頼られる、相談される役割を担っている。家族が困った時にはいつでも、固定

電話、携帯電話で話せるよう受信体制を整えるとともに、Facebook では家族の動向を確認している。家族に対して、物理的には離れていても、心理的にはいつでも近くにいると伝わるような「自己呈示」もしている。リディアのこのふるまいの背景には、親から受け継いだ家族の規範や文化がある。家族の規範や文化の影響という意味では、亡くなった母を偲ぶパーティーの招待状が、e メールや Facebook のメッセージではなく、母の写真入りのカードという手にとれるかたちで、各国の家族に共有された点も重要である。

「具現化された行為」の面としては、身体的能力と認知的能力、そして複数の感覚（触覚、聴覚、視覚、運動感覚、嗅覚など）が、どのような影響を与えているかがポイントになる。リディアは、海外にいる家族からの発信を受信することには積極的である一方で、自分からの発信にはそれほど積極的ではない。そこには、リディアの認知的な力として「機械は大嫌い、こわい、よくわからない」というテクノロジー観が強く働いている。Skype や LINE などのサービスを使えば無料で通話できることを知りながら、わざわざ国際電話用プリペイドカードを購入して使い続けているのはそのためである。しかし、高齢になり身体的能力が低下したことや、経済的な事情により、「身体による旅」を実践して海外にいる家族に会いに行くことは難しくなりつつある。そのことから、家族の顔を見るためにビデオ通話を習得したいという気持ちが芽生え、リディアのテクノロジー観が変化し始めている。

以上のように、リディアの日常的でトランスナショナルな「通信による旅」の実践を「モビリティーズ移動」の演出モデルで分析してみると、必ずしも、最先端の手段、安い手段、速い手段が選ばれているわけではない。一般的に想定される「合理的なアクター」のふるまいとは異なる。実際の日常的でトランスナショナルな「通信による旅」は、「物理的設定、物理的空間とデザイン」、「社会的相互作用」、「具現化された行為」の間で、その都度行われる繊細で複雑な調整の結果として手段が選ばれ、実践されていることがわかった。

5. 結語

本研究では、まず、「モビリティーズ・パラダイム」の議論をふまえ、「身体による旅」、「物の物理的な動き」、「想像による旅」、「バーチャルな旅」、「通信による旅」という五つの「モビリティ移動」の組み合わせや相互関係に着目する「モビリティーズ移動」研究の動向を示した。

次に、2章では人びとの日常的でありふれた「モビリティーズ移動」の実践を理解するためには、どのように調査研究すればよいのか、先行研究をふまえて議論した。調査対象が「動いている」のであれば、調査研究の方法もまた「オン・ザ・ムーブ動いている」必要があるという考え方を前提にした「モバイルな方法」のなかでも、特にエスノグラフィックなアプローチに注目した。伝統的なエスノグラフィーの調査技法に加え、新しいデジタル技術やメディアが人びとの日常生活の一部になっていることを前提とした「デジタル・エスノグラフィー」や、調査者も「動

人びとの日常的な〈移動〉の実践を理解する

く」ことで調査対象の〈移動〉^{モビリティーズ}をとらえる「モバイル・エスノグラフィー」の方法論や事例を概観した。

3章では、エスノグラフィックなアプローチで収集した調査データを、どのように分析すればよいかを、〈移動〉^{モビリティーズ}の演出モデル」という概念的枠組みを導入して考えた。

4章では、筆者が実施した調査研究の事例を取り上げた。筆者が実際にエスノグラフィックなアプローチで実施した調査のデータを、〈移動〉^{モビリティーズ}の演出モデル」を使って分析した。それによって、国境を越える移住という「身体による旅」をした人が、日常的にどのように／どのようなトランスナショナルな「通信による旅」を実践しているかを明らかにした。三つの分析要素「物理的設定、物理的空間とデザイン」、「社会的相互作用」、「具現化された行為」を用いることで、調査対象者による「通信による旅」の実践の背景にある、繊細で複雑な調整のありようを理解することができた。

実際の人びとの日常的な〈移動〉^{モビリティーズ}の実践は、多くの計画やデザインにおいて想定されている「合理的なアクター」のふるまいとは異なり、複雑さや曖昧さや矛盾に満ちている。その実態をつぶさに理解することが、未来のよりよい〈移動〉^{モビリティーズ}のあり方の検討につながることを期待している。

謝辞

調査協力者とその家族に感謝申し上げる。本研究は、2020年度の東京経済大学個人研究助成費（研究番号 20-03）を受けた研究成果である。ここに記して深謝する。

注

- 1) 本稿では、「モビリティーズ・パラダイム」の議論をふまえ、「身体による旅」、「物の物理的な動き」、「想像による旅」、「バーチャルな旅」、「通信による旅」という五つの「移動」^{モビリティーズ}の組み合わせや相互関係、つまり複数形としての「移動」^{モビリティーズ}について言及する場合、一般的な意味での「移動」と区別するため、〈移動〉^{モビリティーズ}と表記する。アーリ〔2015〕は、「モビリティーズ・パラダイム」では、個別の「移動」^{モビリティーズ}に目を向けることもあるが、それぞれのつながりに注目すると述べている。
- 2) 「トランスナショナル」や「トランスナショナリズム」という概念については、パートベック〔2014：4〕が次のように説明している。国家政府間の相互作用、あるいはある国民国家の状況からもう一方へと往来すること（人／旅行、商品／貿易のような）については、これらの実践を「インターナショナル」として説明することが最適である。一方で、国境を越えることを基盤とした国家以外の行為主体の間の持続的な連関と進行中の交流について述べるなら、「トランスナショナル」な実践とその集合体として、「インターナショナル」とは区別できる。

参考文献

- アングロシーノ, M. 柴山真琴訳 [2016] 『質的研究のためのエスノグラフィーと観察』新曜社.
- Büscher, M., Urry, J. and Witchger, K. (eds) [2011] *Mobile Methods*, Routledge.
- CeMoRe [2021] <https://www.lancaster.ac.uk/cemore/research/links/> (2021 年 7 月 13 日アクセス)
- エリオット, A., アーリ, J. 遠藤英樹監訳 [2016] 『モバイル・ライブズ「移動」が社会を変える』ミネルヴァ書房.
- Cresswell, T. [2021] “Valuing mobility in a post COVID-19 world”, *Mobilities*, 16 (1), pp. 51-65.
- Freudendal-Pedersen, M. & Kesselring, S. [2021] “What is the urban without physical mobilities? COVID-19-induced immobility in the mobile risk society”, *Mobilities*, 16 (1), pp. 81-95.
- Goffman, E. [1959] *The Presentation of Self in Everyday Life*, Penguin.
- Informa UK Limited [2021] <https://www.tandfonline.com/action/journalInformation?show=journalMetrics&journalCode=rmob20> (2021 年 7 月 13 日アクセス)
- Jensen, O.B. [2013] *Staging Mobilities*, Routledge.
- Jensen, O.B. & Lanng, D.B. [2017] *Mobilities Design: Urban designs for mobile situations*, Routledge.
- Jensen, O.B. [2021] “Pandemic disruption, extended bodies, and elastic situations - Reflections on COVID-19 and Mobilities”, *Mobilities*, 16 (1), pp. 66-80.
- 加藤文俊 [2006] 「3 章 『ケータイを調査する』から『ケータイで調査する』へ」松田美佐・岡部大介・伊藤瑞子(編)『ケータイのある風景—テクノロジーの日常化を考える—』北大路書房, pp. 181-199.
- Kellerman, A. [2020] “The post-Corona city: Virus imprints and precautions”, *Environment and Planning B*, 47 (7), pp. 1124-1127.
- Kendall, M. [2012] 『La Camioneta』<https://lacamionetafilm.com/> (2021 年 7 月 13 日アクセス)
- 国土交通省 [2021] 日本版 MaaS の推進 <https://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/japanmaas/promotion/> (2021 年 7 月 13 日アクセス)
- Larsen, J. [2014] “(Auto) Ethnography and cycling”, *International Journal of Social Research Methodology*, 17 (1), pp. 59-7.
- 箕浦康子編 [1999] 『フィールドワークの技法と実際 マイクロ・エスノグラフィー入門』ミネルヴァ書房.
- 小内透 [2007] 「トランスナショナルな生活世界と新たな視点」『調査と社会理論・研究報告書』24, pp. 1-11.
- Pink, S., Horst, H., Postill, J., Hjorth, L., Lewis, T., & Tacchi, J. [2016] *Digital Ethnography: Principles and Practice*, SAGE.
- プラマー, K. 原田勝弘・川合隆男・下田平裕身監訳 [1991] 『生活記録(ライフドキュメント)の社会学—方法としての生活史研究案内』光生館.
- Sheller, M. [2014] “Sociology after the Mobilities Turn” in Adey, P., Bissell, D., Hannam, K., Merriam, P., and Sheller, M. (Eds.), *The Routledge Handbook of Mobilities*, Routledge.
- Sheller, M. [2020a] “Ten Years of Transfers: Mobility Studies and Social Change during a Pan-

人びとの日常的な〈移動〉の実践を理解する

demic”, *Transfers*, 10 (1), pp. 22-34.

Sheller, M. [2020b] “Mobility justice in urban studies”, In Jensen, O.B., Lassen, C., Kaufmann, V., Freudendal-Pedersen, M., and Lange, I.S.G. (eds.), *Handbook of Urban Mobilities*, Routledge.

Spinney, J. [2011] “A Chance to Catch a Breath: Using Mobile Video Ethnography in Cycling Research”, *Mobilities*, 6 (2), pp. 161-182.

Urry, J. [2007] *Mobilities*, Polity.

アーリ, J. 吉原直樹, 伊藤嘉高訳 [2015] 『モビリティーズ 移動の社会学』 作品社.

Vannini, P. and Scott, N. [2020] “Mobile ethnographies of the city”, In Jensen, O.B., Lassen, C., Kaufmann, V., Freudendal-Pedersen, M., and Lange, I.S.G. (eds.), *Handbook of Urban Mobilities*, Routledge.

バートベック, S. 水上徹男・細萱伸子・本田量久訳 [2014] 『トランスナショナリズム』 日本評論社.